

## 第2回JOURNAL (6月22日)

5月27～31日 Nottingham滞在

6月1日～ Huddersfield滞在

Research期間も終わりとなりかけた5月末、何気なく立ち寄った Charity Shopが大変興味深い場所であることに気付きました。

Charity Shopとは、イギリスのどこにでもある慈善活動を目的とするお店で一度使われた生活用品が活動基金のために売られています。もちろんその中には衣類もあり、子供のものからお年寄りのものまで普段身に付けられていたような衣類がたくさん。記憶を制作のテーマとし、さらに日本から制作材料を用意してこなかった私にとって、誰かの記憶、生活がしみ込んだそれらの衣類こそが、今回の制作の素材であるように思われ、いろいろな土地でCharity Shopに立ち寄っては古着を購入し始めました。

6月、Jeanetteと私は再会、University of Huddersfieldでの約2か月の制作活動を開始しました。

そしてまず、大学にある設備を使った転写技法や、機械に触れさせて頂く機会をもちました。なかでも工業機械Needle machineは印象的です。以前Jeanetteから、これを使って繊維を混ぜたり、布にたくさんの穴を開けたりすることができるという話を聞いてはいましたが、実際にいろいろな素材を機械にかけてみて、手での仕事とは異なった素材の表情に驚きます。繊維の小さな固まりが、何倍にも膨らんでふわふわに、そしてその後針で押されシート状に固まります。逆に、織られた布を針にかけると織組織が壊され無数の小さな穴の開いたぼろぼろの布となって現れます。

大学から提供して頂いた、充実した設備、制作スペースの中で、

Jeanetteと私は、机を並べそれぞれの作品に向かい合う毎日を送っています。制作時間には、お互いの制作過程を側で感じながら、そして昼食時には、その日の制作状況や、考えについて話し合いながら。実際に、昼食時間も私たちにとって非常に大切な時間の一つです。ほぼ毎昼食後に、制作について話し合うためのsessionをもっているといえるでしょう。

そして、それを繰り返すうちに気付いたことですが、制作スペースで行うsessionとそこを離れた食堂でのsessionには、会話の焦点に違いが生じるようです。作品サンプルを目の前にした制作スペースでは、いまここにある「物」、制作の中で実際に現れた「物の表面」に意識が集中する傾向にあります。制作スペースから離れた食堂では、作品の細部から少し離れ、制作を通して感じられる作品と自分自身との間のずれや、その解消のために目指そうとする方向性といった作品の内容に関する俯瞰的な話し合いができるようです。

今の私の制作段階では、後者の方が必要であるように思われ、私はこの昼食後の食堂でのsessionを楽しみにしています。私の言葉の意味を汲み取り、解釈し、時には私にとっての死角から言葉に光を当ててくれるJeanetteとのやり取りは、とても新鮮で、はっと自分自身の言葉の奥にある意味に気付かされることもたびたびです。そしてまた、限られた英語彙の中で最も自分の感覚や思いに近い言葉を探さなくてはならないという言語的制約も、曖昧なものを明らかにしようとする仕事を助けてくれているような気がしています。

このように今は素材である古着、大学の設備、Jeanetteとのsession、この3者に助けられ、内容的にも技法的にも表現したいものに近づくための実験を繰り返している最中です。これまでテーマとして扱ってきた「記憶」は自分自身のもつ記憶であったのですが、今回、自分以外の人の中につけていた布を素材として扱うことから、初めて、ほかの人の記憶も扱うことになりそうです。布にしみ込んだ知らない人の記憶。そして、この古着を手にしたわたしの記憶。日々実験しながら、自分自身の中にある思いを確認し、探ってゆきたいと思います。